

一、次の文章をよく読んで問いに答えなさい。

地球上の民族は2つに大別できる。狩猟やゆうぼくで移動する民族と、農耕で定住する民族だ。

世界史の主役は、移動する民族であった。ユーラシア大陸やアフリカ、アラビア半島で民族が移動するたびに、世界の歴史はげきてきに転換していった。

移動する民族は最小限の物だけを携帯していた。軽やかな身支度で、速やかに移動した。新しい土地を征服すれば、必要な物は手に入る。彼らにとって大切なことは、迅速に移動し、瞬時に新しい土地をせいあつすることであった。

(A) 不都合になった物は捨てる。不都合な物を修理して使い回しなどしない。放棄した物は人々の意識から去り、ホコリを被り、砂に埋まり姿を消していく。

それが、移動する民族の行動様式であった。

その移動する民族の遺伝子を、21世紀のエジプト人や米国人も引き継いでいた。近代的都市のカイロやニューヨークの華やかなショーウィンドーを見ている限り、彼らが移動する民族であることは感じられない。しかし、放棄された電車や飛行機が、移動する彼らの血を明確に示している。

エジプト人は砂漠を移動した祖先と同じように、不都合な物は捨てて、意識から消していく。ユーラシア大陸から海を渡った米国人も、アメリカ大陸を西へ西へ移動した祖先と同じように、不要になった物は捨てていく。

ユーラシア大陸やアラビア半島で移動する民族たちが世界の歴史を作っている間、ユーラシア大陸のきよくどうの海に浮かぶ列島でひっそりと日本文明が生まれていた。

3 きよくどうの海に浮かぶ日本列島の人々は、特異な文明を誕生させていった。

日本列島とユーラシア大陸の間には200kmの海峡が横たわり、海流がはげしく流れていた。ユーラシア大陸の大移動する暴力も、この日本列島にはたどり着かなかった。日本列島を征服することもなかった。

日本列島の中央には脊梁山脈が走り、その脊梁山脈からは日本海と太平洋に無数の川が流れ下り、河口部には小さな湿地が形成されていた。日本列島に点在する狭い土地は、海峡と山々と川で分断されていた。

5 約3000年前、この日本列島に住む人々は、他の土地と分断された湿地帯で稲作を開始した。米は富であった。米は保存が利き、計量ができて、何とでも交換できた。(B)、その米を得る労働は忙しく過酷であった。雪解け時には川から水を引き、硬い土を起こし、苗を植え、水を管理し、雑草をのぞき、洪水を防ぎ、稲穂を刈り取った。冬は冬で、耕作の道具作りや春の準備で忙しかった。

日本列島の人々は、湿地にへばり付き、止むことのない労働で稲作社会を形成していった。(中略)

この分断された土地には、外部から資源が投入されることはなかった。そのため、人々はその土地にある全ての物を有用な資源にした。不要な物など一切なかった。物はどのような姿になっても、常に人々に有用な物として存在した。移動しない日本列島の人々は、物を捨てない性格となった。

日本人の物への強い執着の例は、身近な着物に現れている。

植物の綿から美しい着物がおられる。何十年間、着古した着物は、布団の布に再利用された。(C)、何年かの後、布団の布は座布団の布となり、さらに何年かの後、その布は下駄の鼻緒や雑巾になった。下駄の鼻緒や雑巾の役目を終えたポロは燃やされ灰となり、土に戻って再び綿の栄養分となっていった。

布は時々で姿を変え、役目を変えていった。

輪廻転生の宗教思想は、日本人にとってはのうないの思想ではない。実生活の物のあり方と結びついていった。

日本人の好きな言葉に「もったいない」がある。これは「勿体が無い」からきている。

7 「勿体」(D)「物体」は固定した姿を持たない。物は止めどなく姿を変え、役目を変えていく。「もったいない」は、物は限りなく姿を変えていくが、そのたびに何らかの有用な役目を果たすことを教えている。

8 「もったいない」は日本人の口ぐせになっている。小さいときは両親から「もったいないことをするな」と叱られる。自分が親になってからは、子供に向かって「もったいないぞ」と叱る。

世界を見回しても、このような言葉が幅を利かしている社会は見当たらない。この「もったいない」が口ぐせの日本人が、物を捨てないで繰り返し使うリサイクル社会を構築していった。

注 日本のGDP当たりのエネルギー供給量を1・0とすると、EU全体では1・8倍、米国は2・1倍、カナダは3・1倍、中国は8・3倍、ロシアは16・8倍となっている。省エネルギー社会としては、日本は他を圧倒している。

日本がこの省エネルギー社会を構築した理由は、「天然資源を保有しないため」「海外に生産をアウトソーシングしたから」といわれている。しかし、同じ天然資源を保有せず、生産を海外にアウトソーシングしているヨーロッパと比べても、その投

入エネルギーは少ない。

日本人の心と身体に深く浸み込んだ「もったいない」という物に対する精神が近代の省エネルギー社会を生み出していった。この省エネルギー社会を構築したのは、日本人が道徳的に優れてきたからではない。日本人が他国の人々に比べ賢かったからでもない。

日本列島という地形が、日本人の性格を形成していった。

民族の性格は、その土地の気象と地形が決める。この「もったいない」という日本人の性格もそうであった。

(中略)

低炭素で持続可能な21世紀の社会は、まちがいなく循環社会である。その循環社会の構築は、この「もったいない」の心を持った日本人が先頭になって歩いていくこととなる。

(竹村公太郎『日本史の謎は「地形」で解ける』(見出しや図やグラフは省略した))

注 脊梁山脈……陸地の中心を背骨のように走る山脈。多くの場合、その両側で気候なども異なる。

輪廻転生……生き物は、死に、そして生まれ変わり、それを果てしなく、くり返すというものの考え。

GDP……国内総生産。一定期間内に、国内で生み出された価値やサービスの付加価値の合計のこと。

アウトソーシング……自分たちの仕事を、外部に行わせること。外部委託。

問1 —— a～hの部分の漢字に直しなさい(送り仮名が必要なものはそれも書くこと)。

問2 (A)く(D)に入る最も適当なことを次の中から選んで、記号を書きなさい(同じ記号は二度以上使いません)。

A さらに イ しかし ウ つまり エ そのため オ なぜなら

問3 —— 1、なぜ、不都合な物を修理して使い回さなくてもよいのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問4 —— 2、「彼らの血」と同じ意味で使われていることばを文中から六字ぬき出して答えなさい。

問5 —— 3、なぜ日本では「特異な」文明が誕生したのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問6 —— 4、どのようなことを指して「大移動する暴力」と言っていますか。

問7 —— 5、どのような点から「米は富」と言っていますか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問8 —— 6、なぜ日本人は物を捨てない性格になったのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問9 —— 7、この例として、どのようなことが挙げられていますか。文中から十九字ぬき出して答えなさい。

問10 —— 8、このことの根拠として筆者はどのようなことを挙げていますか。

二、次の文章をよく読んで問いに答えなさい。

室町時代、京都は地震、竜巻、長雨、洪水、凶作におそわれ、また武士たちが合戦をくり返していた。

おさない時から人見知りをせず、だれとでもすぐにうちとけて友だちになる蓮如の性格はさびしさのうら返してもあった。

親鸞さまを信じてついていきなさい、ということばを残していなくなった母。蓮如は毎晩さびしく悲しくて夜も眠れぬ日が続いたが、母のことばを胸に、心のさびしさを外に出さずに、明るくのんびりとかまえていようと決心した。月日は流れ、出家して正式にお坊さんになるための儀式をすませた蓮如。京の町に大事な用を言いつかって出かけた帰り道での出来事である。

〈それにしても、この妙な匂いは?〉

蓮如は雑草のおいしげった堤の下へ【あ】をこらした。道からはかげになっているくぼみに、なにか動くものの影が見えた。(A) 数匹の野良犬が、何かを狙っているらしい。

〈なんだろう?〉

蓮如は草をかきわけて斜面を降りていった。すると、思いがけないものが目にはいつて、彼は立ちすくんだ。

1 むしろの上に捨てられている老人の死体があつた。その片方の足先に、黒い犬が【い】をむき出して噛みついてるのだ。その犬は首を左右にはげしくふって、老人の足首を食いちぎろうとしていた。ほかに二、三匹の犬たちが自分たちも餌にありつこうと、唸り声をあげながら黒犬のすきをうかがっている。

しかし、おどろいたことに、その老人は(B)生きていたのだ。目をひらいて、なにか(C)つぶやきながら、枯木のようなもので犬を追いはらおうとしていた。

「こらっ! あっちへいけ!」

蓮如は犬たちに大声でどなった。足もとの石をひろって投げつけるまねをすると、犬たちは唸りながら、あとずさりし、蓮如と老人をすこし離れたところから (D) みつめた。

「だいじょうぶですか」

と、蓮如は老人を抱きおこして言った。老人は物をこするようなかすかな声でこたえた。

「ア なわけがないじゃろ。わしはもうすぐ死ぬんじやよ」

蓮如はすぐに、その老人が河原に捨てられた病人だと気づいた。大きな商家や、身分の高い家では、家から死人を出すことを嫌ってもう助かりそうもないという病人は、生きたまま捨てられることがしばしばあったのである。

ひと碗の水と、おむすびひとつをあたえられ、イ にのせて置き去りにされた病人のなかには、生きながら野犬にくわれたりする者もあるという話だった。

犬が歯をたてた老人の足首から白い骨が見えている。蓮如はどうしていいかわからずに大きなため息をついた。老人はとぎれとぎれの声で言った。

「足はすでに腐っておるから**みも**感ぜぬが、やはり生きていろうちに犬に食われるのは情けない。坊さま、ひとつ、わしの首をしめて息をとめてくださらんか」

「それは——」

「やはり無理かのう。しかし、自分で【う】を噛んで自分で死ぬ力もない。というて、このまま放っておかれては、生きながら犬に食われることになる。はて、なんとも情けないことよのう」

蓮如はどうしていいかわからずに、とほうにくれた。たのまれたとて、まさか老人の首をしめるわけにはいかない。

というて、このまま放っておけば、あの野良犬たちにウ 食われてしまう。

へしかたがない」

と、蓮如は思った。ここにいて、犬を追いながら、老人の息がたえるまで見守っていてやるしかないだろう。

蓮如は草の上に【え】をおろした。春の日ざしは、(E) 二人の上に降りそそいでいる。

「そばにいてくださるのか」

「はい」

「ありがたいことだ」

と、老人はかすれた声でつぶやいた。

「お坊さまはいいのう。わしら下下の者とちごうて、寺の人たちは死んでも地獄へいかんでも良いんじやろう」

「なぜ地獄へいくと思うのですか」

「そりや、きまつとる。わしらは坊さまたちとちごうて、修行もせん、ありがたいお経も読まん。えらい人や金持ちのように、信心して寺まいりするひまもなく働きづめの一生での。商売では人をだまし、たくさん殺生もした。だから死んだら地獄へいくことに決まつとるんや。ああ、情けない。生きれば犬に食われ、死ねばまた地獄で鬼にせめられるのか。坊さま、わしらにはほかに道はないものかのう」

老人は泣きだした。

「あります」

思わず蓮如は大声で言った。そして、自分で自分の**はつ**した言葉におどろいた。何か目に見えない力が声を出させているような感じがしたのだ。蓮如は言った。

「苦しんで生きて、年をとって病気になるって、そして捨てられて犬に足を食われて、そのうえ地獄へなんかいくことがありますか。だいじょうぶですよ。あなたは仏さまの光につつまれて、きっと、明るい浄土へ迎えられるでしょう。阿弥陀さまと**ちか**と誓いをたてて仏になられたのが阿弥陀さま。いいですか。信じてください。このわたしの言葉は、わたしの言葉ではないのです。それはわたしが学んだ親鸞聖人のお言葉、法然上人のお言葉、いや、阿弥陀さまそのかたのお言葉。それを【お】うつしにお伝えしているだけなのです。それを信じていただけますか」

老人はかすかに笑った。そして、あえぎながら言った。

「ああ、信じるとも。犬に足を食われて、いまにも地獄へ落ちようとしているわしには、ほかにする言葉もないからのう。たよる仏さんもおらん。だから、さあ、言うてくれ。そなたの言葉を信じよう。その阿弥陀さんとやらにすくうてもらうには、どうすればいいんじや。念仏をとなえてお願いすればいいののか」

「いいえ。いまはもう、おまかせします阿弥陀さま、と、まようことなかつただ一筋に信じるしかありません。そうすれば、かならず浄土へ迎えられるのです。そなたをすくうぞ、と阿弥陀さまが手をさしのべていらっしやる。その声に、ありがたや、おたのみします、とおうずれば、即座に浄土への道がひらけるのです。そう親鸞聖人は教えておられるのですよ」

「目に見えん仏さんの言葉は聞こえんが、あんたの声は聞こえる。いまのわしには阿弥陀さんとやらにまかせれば、すくうてもらえるという、あんたの言葉を信じるしかない。その話を信じてよいのじゃな。事実、嘘うそいつわりのない本当のことじゃな。坊さま、そなた自身も、口だけの説法でなく本当にそのことを心から信じているのじゃな」

5「瞬ひしゅん、蓮如は目をとじた。彼は全身を耳にして自分の体の中にひびく声を聞こうとした。そのとき静かな声が蓮如の心に降りかかってきた。それは、六歳さいのとき、別れぎわに聞いた母親の声だった。

〈親鸞さまを信じて、ついてゆくのです〉

蓮如の体に光ひかりのたばが突きささったようなふるえがはしかった。ありがたい！ と彼は心で叫きんだ。

〈おれは母上の言葉を信じる！〉

なにもかもすべてを阿弥陀さまにおまかせして、一心に念仏すれば、人はみなかならずお浄土に往生じやうじゆできるの、と母上は言われたのだ。母上の言葉は阿弥陀如来にょらいの言葉なのだ。そのとき蓮如にはすこしの疑いもなく母の言葉が信じられたのだ。彼の心はよろこびでふるえた。

「なむあみだぶつ」

と、蓮如はつぶやいた。本当に体の奥おくから自然とあふれてきたような念仏だった。彼は老人に言った。

「わたしは真実、阿弥陀さまのすくいを信じています。一点のまよいもありません。このわたしの信心は、母から、いや仏からいただいたもの。わたしの言葉を信じてくださって結構です」

「ありがたいことだ」

と、老人はつぶやいた。そしてうれしそうに蓮如の【か】をにぎると、

「なむあみだぶつ」

と、苦しい息のなかでとなえ、そのまま動かなくなった。

どうやら息絶えたらしい。

6 蓮如は老人をむしろにつつま、肩かたにせおって歩きだした。鳥辺山注まで運んで、そこにほうむることに決めたのだ。

そのとき蓮如の心は、おどろきと、老人に対する感謝の気持ちでいっぱいだった。生まれてはじめて、自然に口をついてくる真実の念仏に出会えたのだ。

お念仏とは自分の口でとなえるものだとはばかり思っていたのだが、じつは目に見えぬ大きな力によってとなえさせられているということに気づいたのである。なむあみだぶつ、というその声が真実まことのとうはいものに感じられて体がふるえた。それは、この老人のおかげではないか。

彼はそのとき、これまでの自分とちがう自分に生まれ変わったような気分だった。自分の仕事は、この老人のような多くのあわれな人びとに、自分がいま本当に信じられたことを広く語り伝えることなのだ、と、そのとき固く心に決めたのである。

(五木寛之『蓮如物語』)

注 浄土……仏の世界。

往生……浄土に生まれること。

鳥辺山……当時、京都では、人の死体を町はずれに運んで放置したが、鳥辺山もその一つ。

問1 —— a～hの部分を漢字に直しなさい(送り仮名が必要なものはそれも書くこと)。

問2 (A)～(E)に入る最も適当なことばを次の中から選んで、記号を書きなさい(同じ記号は二度以上使いません)。

ア まだ イ かなり ウ じつと エ とうとう オ どうやら カ ぶつぶつ キ うらうらと

問3 [ア] [ウ]に入る最も適当なことばを文中からそれぞれ六字、三字、五字ぬき出して答えなさい。

問4 [あ] [う] [か] に最も適当な体の部分を表すことばを入れなさい(平仮名でもよい)。

問5 —— 1、なぜ老人はここに捨てられていたと考えられるのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問6 —— 2、なぜ蓮如はこうするしかないと思ったのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問7 —— 3、何があると蓮如は言っていますか。

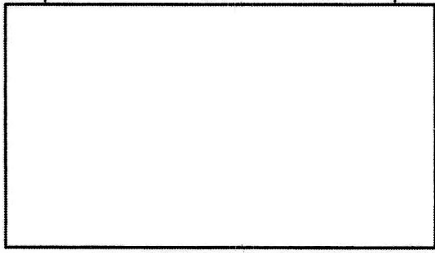
問8 —— 4、蓮如は「阿弥陀さん」をどのような仏であると言っていますか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問9 —— 5、蓮如はなぜこのようなことをしたのですか。

問10 —— 6、どういうことに蓮如はおどろいたのですか。できるだけ文中のことばを使って答えなさい。

問11 蓮如のことばの、「～と」「」の使われ方のちがいを説明しなさい。

↓ここにシールをはってください↓



2026年度 国語 解答用紙 A日程

受験番号				
------	--	--	--	--

関西学院中学部 (2026年1月17日)

問1		問10	問9	問8	問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1	
e	a									A	e	a
f	b									B	f	b
g	c									C	g	c
h	d									D	h	d
			ハム。									

二、

一、

※答えは解答らんの中に、濃くはっきり記入すること。 ※句読点やその他の記号も一字と数えます。

問11	問10	問9	問8	問7	問6	問5	問4	問3	問2
「	〈						お	ア	A
」	〉						あ	イ	B
							か	ウ	C
							い	エ	D
							う	オ	E
							え		